

自己肯定感を醸成し、何事も 粘り強く行う生徒を育てる 「新川創生プロジェクト」

変革のステップ

背景と課題

- 学力面から自分に自信が持てず、思うようにいかないと、すぐに諦めてしまう生徒が少なくなかった

実践内容

- 「**新川創生プロジェクト**」の推進 生徒に様々な成功体験を積み重ねられるよう、地元の富山県魚津市や富山大学と連携協定を結び、PBL(*1)などを行う「新川創生プロジェクト」を始めた。取り組みを本格化させた2018年度の1学年では、「総合的な学習の時間」とロングホームルームを中心に同プロジェクトを推進。自分のよさや強み、自分のできることを実感させられるよう、PBLなどを行った。また、定期的に生徒に振り返りをさせ、その結果を基に同プロジェクトの成果を検証した
- **学び直しの工夫** 18年度の1学年では、放課後などに数学の学び直しに力を入れた。生徒の実態に応じた指導ができるよう、習熟度別のプリントを作成した

成果と展望

- 生徒の自己肯定感が醸成され、学習意欲が向上
- 多くの生徒が学力を向上させた

生徒に成功体験を積み重ねるべく、 地域と連携した取り組みに着手

富山県・私立新川高校は、同県北東部の「新川地区」唯一の私立高校だ。普通コースと特別進学コースから成り、4年制大学や専門学校などへの進学から就職まで、多様な希望進路を抱く生徒が集まる。生徒は素直な半面、小・中学校段階での成功体験が少ないためか、自分に自信が持てず、思うようにいかないことがあると、すぐに諦めてしまう傾向にあった。濱元克吉(はまもとかつよし)教頭は、次のように話す。

「自己実現のためには、つまずいても立ち上がり、粘り強く課題解決を図る必要があります。そうした意欲を醸成できるように、生徒

PROFILE



高岡日本大学高校魚津校舎として開校。教育目標に「心豊かで創造性に富み、主体的に行動して、社会に貢献できる生徒を育てる」を掲げ、道徳教育と能力・個性の伸長を両輪とする教育活動を行っている。

設立 1973 (昭和48)年

形態 全日制/普通科/共学

生徒数 1学年約120人

2019年度進路実績(現役のみ) 私立大は、富山国際大、金沢学院大、愛知工業大、日本福祉大などに延べ8人が合格。短大、専門学校進学25人。就職43人。

住所 〒937-0041 富山県魚津市吉島1350

電話 0765-24-2015

Web site <https://www.niikawa.ed.jp>

* 1 Problem Based LearnigあるいはProject Based Learning の略。

* プロフィールは2019年3月時点のものです。

に様々な成功体験を積みませ、『やればできる』
という実感を抱かせたいと考えました」

そこで、2017年度、地元の魚津市や富山
大学と連携協定を締結し、グループでのPBL
やキャリア教育などを行う「新川創生プロジェ
クト」を始めた。17年度は不定期での実施だっ
たが、18年度の1学年からは、週1回ずつの「総
合的な学習の時間」とロングホームルームなど
で定期的に行うことにし、取り組みを本格化さ
せた。さらに、両コース共通の3年間の段階的
な指導計画も策定。1年次には、自分のよさや
強み、自分にできることを意識させ、2年次に
は、自分が社会で何がしたいのかを具体的に考
えさせる。そして、3年次には、生徒一人ひと
りの希望進路に応じて、面接対策や志望理由書
作成のための個別指導を行う計画だ。濱元教頭
は、同プロジェクトのねらいをこう語る。



教頭
濱元克吉 はまもと・かつよし
教職歴20年。同校に赴任して21年目。数学科
「まず自分が感動してこそ、人を感動させら
れる。『目らが動く』教師でありたい」



1学年担任
浅井嵩元 あさい・たかもと
教職歴12年。同校に赴任して6年目。数学科
『楽しさの中に、面白さあり』をモットーに、
生徒と向き合っていきたい」



1学年主任
永原祥 ながはら・しょう
教職歴6年。同校に赴任して7年目。理科
『できる』『分かる』を目標にした指導を行い、
生き方教育を実践していきたい」

「生徒には、多くのことに挑戦しながら、
自分の可能性を探ってほしいと思っていま
す。そこで、活動の場を多様にできるよう、
地域と力を合わせて取り組むことにしまし
た。そうすれば、次期学習指導要領の理念で
もある『社会に開かれた教育課程』の実現に
つながるとい思いがありました」

前向きに取り組めるよう、生徒 同士が考えを共有する環境を整備

18年度の1学年での取り組みを見ていく。
1学期には、自己理解を深める第一歩として、
生徒が中学時代までを振り返って、自分が何に
関心があるのかを探ったり、1年次における目
標を立て、それを3学期の自分への手紙として
書いたりした。そして、関心や目標をクラスメー
トと語り合い、クラスで発表する場面も積極的
に設けた。それらの活動のねらいを、1学年主
任の永原祥先生はこう話す。

「本校には、『自分のやりたいことが分から
ない』と言う生徒が少なくありません。そこ
で、自分の考えを持ち、それを恥ずかしがら
ずに言葉にできる環境を整えることを大切に
しました。クラスメートの考えに生徒は刺激
を受け、『自分もやってみよう』という前向
きな気持ちになると考えました」

学校行事も同プロジェクトの趣旨から見直
し、1学期末には、同校の伝統行事であるボラ
ンティア活動を行った。それは、全学年に設定

写真1 清掃活動の準備として、各グループはタブレットを持って地域を歩き、清掃が必要だと思う場所を撮影。学校に帰った後、それを見ながら、役割分担や清掃に必要な道具などについて話し合った。複数の場所を清掃しようとする場合は、優先順位も決めた。

されており、以前は教師が活動内容を指定する
学年が多かったという。18年度の1学年では、
同プロジェクトの一環と位置づけ、生徒同士で
自分たちができることを話し合わせた結果、地
域の清掃活動に取り組むことになった。そして、
生徒が5〜6人のグループに分かれ、通学路や
最寄り駅周辺を歩き、清掃する場所や役割分担
などを決めていった(写真1)。事後には、グルー
プごとに活動を振り返り、工夫した点や反省点
などをクラスで発表。代表のグループは学年集
会でもプレゼンテーションを行った。1学年担
任の浅井嵩元先生は、生徒の姿をこう語る。

「広範囲を効率よくきれいに清掃できるよ
う、何度も下見をするなど、主体的に行動す
るグループが目立ちました。そうした中で、
気になることがあれば何でもクラスメートに
相談し、力を合わせようとする雰囲気がか

スに醸成されていったと感じます。また、清掃活動を通して、生徒たちは地域美化の大切さに改めて気づいたようです。『ゴミのポイ捨てはやめよう』といった啓発ポスターを作成し、校内に掲示するグループもありました」

教師は「相談に乗る」に徹し、 「生徒に考えさせる」指導を推進

2・3学期には、地域の活性化を図るPBLを行った。そこには、答えが1つではない問いに向き合わせ、自分たちの力を試させるねらいがあった。

まずは、地域の実態を「知る」ことを重視。魚津市役所の職員らによる講演会を設定し、少子高齢化を始めとする様々な課題を具体的に話してもらった。各グループは、その中から関心のある課題について書籍やインターネットで調べ学習を行い、地域美化や観光客の誘致などのテーマを設定した。次に、テーマに応じた解決策を探るため、フィールドワークを実施。例えば、観光による町おこしを考えるグループは、地域の特色ある施設のPR方法を見つけるため、「魚津埋没林博物館」(*2)などを取材した。学年団では、「生徒に考えさせる」という指導方針を共有。具体的には、テーマを思うように設定できないグループには、「魚津市の気になるところは何か？」などとアドバイスをした。指導は基本的に担任が行ったが、教科担当の教師も空き時間には各教室を回り、生徒たち

に声をかけた。

「本校では初めての取り組みなので、1学期に富山大学の先生を講師として招き、PBLについての教員研修を行いました。そこで強調されていたのが、教師が『教える』のではなく、『相談に乗る』指導です。週1回、学年団の全教師が集まる学年会議などで、そうした指導方針を共有することに力を入れました」(永原先生)

生徒が失敗を恐れなくなるよう、 多様な社会人の失敗経験を伝える

2学期末には、外部のキャリア教育プログラムを活用し、20〜30歳代の社会人ら二十数人を招いた特別授業を設定。まず行ったのが、PBLの中間発表だ。

「社会人との質疑応答に備えて、生徒たちは事前に質問を予想し、答えを用意していましたが、本番では想定外の質問を受けることも多く、1つのテーマにいくつもの見方があることを実感したようです。中間発表後は、より多様な観点から課題を分析し、解決策を考えるグループが目立ちました」(永原先生) 続いて、大学生と社会人に自分の失敗経験を述べてもらう講話を実施した。

「本校の生徒には、『1度つまづいたら起き上がれない』といった思い込みがあり、やりたいことが見つかったも、それに挑戦できない傾向が見られます。そこで、思い通りの人



写真2 「魚津市への提案発表会」には、学年の代表として7グループが進出。どのグループも、自分たちの提案を分かりやすく示せるよう、プレゼンテーションソフトで作成した資料を投影するなど、発表方法を工夫していた。発表会の最後には、審査員が優秀グループを選んで表彰した。

生を歩んでいるように見える大人にも、失敗や挫折は多くあり、それらは乗り越えられることを伝えたいと考えました。本校の事務長が窓口となり、転職や起業など、様々な経験を持つ人たちを招きました」(濱元教頭)

3学期には、各グループが最終的な解決策をまとめ、学年集会で発表した。そして、魚津市長や富山大学学長らを審査員として招いた「魚津市への提案発表会」では、代表のグループがプレゼンテーションを行った(写真2)。

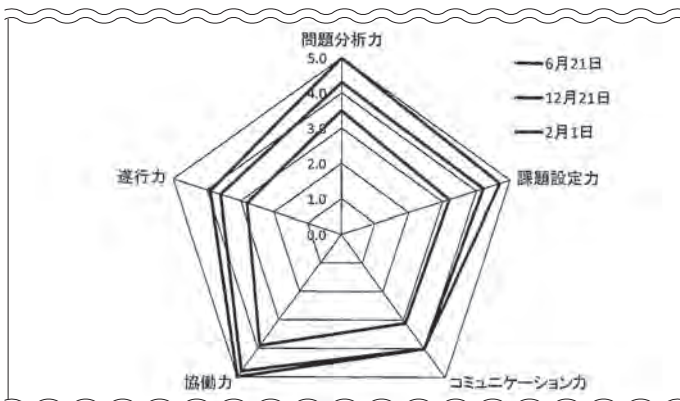
「自分たちで工夫しながら取り組んできたテーマなので、どのグループも堂々と発表をしていました。審査員による講評でも、地域の課題を的確に把握しているといったコメントが目立ち、生徒たちはうれしそうでした。『やればできる』という自信につながったと思います」(浅井先生)

* 2 国の特別天然記念物に指定されている「魚津埋没林」を保存・展示する公立博物館。埋没林とは、土石流や海面の上昇などにより、森林全体が地中・水中に埋没したものの、魚津市の漁港の海底で発見された、約2000年前の杉の埋没林を魚津埋没林という。

生徒の振り返りの結果を 指導改善に生かす

同プロジェクトの成果検証としては、各学期末に1回、2つのツールを用いて生徒に振り返りをさせた。1つめのツールは、「対人基礎力」「対自己基礎力」「対課題基礎力」を自己評価する「新川ルーブリック」で、他校の取り組みを参照して作成した。もう1つのツールは、「問題分析力」「課題設定力」「コミュニケーション力」「協働力」「遂行力」を測るアセスメント「能力特性評価（NTH）」（図1）で、富山大学が学生の潜在的な資質・能力を把握するために開

図1 3学期の「能力特性評価（NTH）」の帳票（抜粋）



「能力特性評価（NTH）」の結果は、帳票として生徒に返却する。その際、資質・能力の変化を示すレーダーチャートを掲載し、生徒の自己理解を深めようとしている。
*学校資料を編集部が一部改編。

発したものを改編した。

「同プロジェクトの指導に携わる教師には、生徒の変化が肌感覚で分かります。そうした変化を可視化し、定点観測することで、指導改善につなげやすくなりました」（濱元教頭）

学習意欲の醸成に向け、生徒の実態に応じた学び直しを行う

18年度の1学年普通コースでは、学力向上にも力を注いだ。例えば、数学科では、定期考査期間などを除いて毎週、2つの学び直しを実施。1つは、同コースの1年生全員を対象に、月々木曜日の帰りのホームルーム後の15分間で行った数学の問題演習だ。教材に用いるプリントは、濱元教頭や浅井先生ら数学科の教師が、「基礎力診断テスト」（*3）の診断レポートの結果を基に、毎回、習熟度別に4種類を作成した。

「問題が難しすぎたり、易すぎたりすれば、生徒は学習意欲を失ってしまいます。生徒の実態に適切に応じられるよう、プリントの難易度を柔軟に変えるようにしました。また、担任が必ず立ち会い、問題演習から自己採点まで、生徒自身にきちんと行わせることにしました」（濱元教頭）

もう1つは、同テストのGTZ（*4）がD3の生徒を対象とした補習だ。月・水曜日の7時限目に浅井先生が指導。金曜日には、その週の補習で学習した内容を出題するテストを実施し、合格すれば、翌週から補習の対象外とした。

自分に自信を持ち、教科学習に意欲的に取り組む生徒が増加

18年度の1学年では、同プロジェクトを進める中、何事にも前向きに取り組む生徒が増えていった。地域の課題を自分事として捉え、PBLを行う生徒が多かったことは、前述の通りだ。そうした意欲は、教科学習にも反映された。その1つが、基礎力診断テストの成績向上であり、GTZがD3の生徒が、1年間で大きく減った。

「ボランティア活動やPBLを通じてクラスメートと協働して学ぶ中、生徒一人ひとりが成功体験を積み、自分に自信が持てるようになったのだと思います。教科学習にも、粘り強く取り組み始めました」（浅井先生）

18年度の1年生の自己肯定感が向上したことは、「新川ルーブリック」による自己評価にも表れた。例えば、「話し合いの場では、自分と反対意見を言う人がいても、自分の考えをはっきり言うことができる」「自分の強みをうまく生かすことができている」と自己評価する生徒が年間を通して増え続けた。今後は、自己肯定感と学力との相関を把握できるよう、「新川ルーブリック」による自己評価と基礎力診断テストの結果をクロス分析することを検討している。

「同プロジェクトは、緒に就いたばかりです。18年度1学年における成果を適切に検証し、さらなる発展につなげたいと考えています」（濱元教頭）

*3 ベネッセのアセスメント「進路マップ」の1つで、義務教育範囲も含めた基礎学力を測るマーク式テスト。

*4 ベネッセのアセスメントにおける共通の学力評価指標「学習到達ゾーン」のこと。「S1」～「D3」までの15段階で評価される。基礎力診断テストでは、そのうち「A2」～「D3」で評価される。